

リージェンツ・パークの造成過程と基盤整備

芝 奈 穂

はじめに

本稿では、19世紀初頭のロンドン北西部におけるリージェンツ・パーク (Regent's Park) の基盤整備とそれに付随する土木事業に焦点を当て、それがいかなる計画と議論のもとに行われたかについて論述することを目的とする。リージェンツ・パークはリージェント・ストリート (Regent Street) と並んで、「都市改造」(metropolitan improvement) の要とされてきたが、「都市改造」についてのこれまでの研究は、主にリージェント・ストリート計画に着目したものであった。John Summerson や Hermione Hobhouse, Dana Arnold 等の研究は、当該パークと都心を結ぶ幹線道路として、リージェント・ストリートが計画の段階でいかに重要視されたかを考察している¹⁾。また、Geoffrey Tyack の最近の研究により、19世紀半ばにリージェント・ストリート計画がさらに拡大し、ロンドン中心のチャリング・クロス一帯を含む文字どおり、抜本的な「都市改造」へと発展していった過程が明らかにされた²⁾。一方で、パーク計画およびストリート計画双方の立案を主導した森林局 (the Office of Woods, Forests and Land Revenues) やその上部組織である財務省 (The Treasury) および森林局に属する建築家でこれらの計画の実質の立案者、かつ造成工事の統括者でもあったジョン・ナッシュ (John Nash) らの功績を論じた研究は枚挙に遑がなく、そこにパーク計画に関する考察も多く含まれる。しかしながら、これらの研究においても、当該パークのデザインについて探究するものが大半であり、とりわけ、18世紀以降の風景式庭園や18世紀末から19世紀初頭にかけて

のピクチャレスク理論との関連で論じたものが少なくない³⁾。

これらに対して、本稿はリージェント・ストリートとの関係はいったん脇に置き、当該パークの造成過程、たとえば、パーク北側外周付近を流れる運河、パークの周囲および内部の道路建設、植樹等による緑地造成、パーク内の湖造成等々、土木事業を概観することによって、当該パークの土台がどのようにして築かれたかを都市整備の観点から論述するものである。なお、当該パークの造成過程については、Summerson や Ann Saunders, Todd Longstaffe-Gowan 等の研究で断片的に触れられてはいるものの、当該パークのデザイン計画実現の前段階としての位置付けに留められている点は否めない⁴⁾。本稿はイギリス公文書館 (The National Archives) 所蔵の史料を用いて、当時のありようを再現するものである。

1. 当該パーク計画の造成過程における王室側の目論見

当該パークはもともとメリルボン・パーク・エステート (Marylebone Park Estate) と呼ばれた王室 (the Crown) エステートであり、その起源は16世紀前半のヘンリー8世の治世まで遡る。その後、18世紀後半からその他の王室エステートを含めて、当該パークの経営が議論され、それが19世紀初頭に王室による不動産計画を主体とした当該パーク計画として結実する。その造成過程を概観するにあたって、最初に着目すべきは、この事業の目的とそれを主導した森林局および財務省の財政に関する基本的な姿勢であろう。当該事業は王室歳入増を主要目的とし、当該王室エステ

ートを住宅地として開発することによって地代を獲得しようとしたのが出発点である⁵⁾。その遂行のためには、第一に当該事業に対して、造成費用をできる限り抑えること、第二に、より高い地代を得るためにより高級な宅地開発を行うことの二点に尽きるが、当該事業を実際に司る森林局と財務省は、当該事業の最も初期の段階から、その仕組み作りを行い、その後の造成過程さらには建設過程において実行に移したのである。

当該事業は公共事業と私的事業の結合であったが⁶⁾、それこそが、宅地開発を核とした当該事業からの王室歳入増という至上命令を達成させるために森林局と財務省が作り上げた仕組みそのものであった。すなわち、前者の公共事業の側面については、前段落で述べたいかに造成費用を抑えて開発を行うかという第一の点につながるものである。宅地開発前に全体の用地を道路建設や排水設備、植樹等を通して魅力的に造成する必要があるが、その実質的な公共事業の側面に対して、以下本稿で見るとおり、森林局および財務省は、造成費用をできるだけ抑えるべく様々な工夫を凝らしている。第二の私的事業の側面については、前段落で触れた宅地開発に直結するものである。これは、造成終了後、開発業者に委ねられており、完全に私的事業であった。Arnoldの研究が端的に示すように、森林局および財務省にとって非常に都合のよいやり方が取られたのである⁷⁾。具体的には、複数の建設業者に敷地内部にヴィラ複数戸、敷地周囲にはテラスハウス十数棟の建設を請け負わせ、その費用については周囲の下水設備や取り付け道路等の整備を含めて概ね建設業者に負担させたため、王室側からの支出はなかったのである。さらに、建設業者が建物完成後に通常99年間に及ぶ住宅リース権を個人に売却すると、大家である王室が地代を99年間にわたって得ることができ、極め付きはリース終了後、すなわち99年後には、建物ごと土地が王室側に返却されるという約定であった。当該パーク計画において、その建設および維持費用が莫大であったことはよく知られているが、それゆえに王室サイドの如才なさが際立つ事業であったことは否定できない。

本稿では、この仕組みのうち、第一の造成費を抑える目的のもとに施工された公共事業としてのパーク造成に関わる土木工事を見ていく。基本となる流れは、森林局とナッシュの間の、そして、森林局と財務省の間の幾多にも及ぶ遣り取りや、また森林局のコミッショナーたち、および財務省役人たちの会議を通して、建設材料から建設方法に至るまであらゆる事柄が詳細にわたって話し合われ、それがナッシュの手によって実行されたというように要約されるであろう。

ナッシュは、Jonathan Clarkeが指摘するように、建築家でありながら、土木技師としての才能も際立っていた⁸⁾。当該パークを見ると、その美しいランドスケープが注目されるあまり、彼の建築家としての側面ばかりに目が当たってきた感があるが、その美観の土台を作り上げたものは、土木工事であり、当該工事を推進したのがナッシュであったことはいくら強調してもしすぎることはない。当該パークにおける道路建設や植樹、湖造成、下水整備等において、彼はその力量をいかんなく発揮している。さらに言うならば彼の最大の功績は、土木技師の側面と建築家の側面の二つを結びつけたことである。機能性と美観の融合であった。

2. 造成過程と費用

森林局が1816年に出版した『第2報告書』には、「(設計図)で計画された道路、フェンス、植樹が完了し、建設予定の湖(ornamental water)の湖底が掘られ、リージェンツ運河会社(Regent's Canal Company)がパークの敷地を通る運河の建造を完成させた」と述べられており、1812年頃にナッシュの改定設計図(第2設計図)が局内で了承を得る直前から始まった造成工事の第1工程は4年の歳月をかけて終了したことが読み取れる⁹⁾。同報告書に掲載された決算においても、1811年10月から1815年10月まで、収入はパーク内に存在していた複数の農家やパブ等を取り壊した際の古い建築材を売却した費用、パーク建設が進むまで牧草地としてリースされた土地の地代、リージェンツ運河造成のためにリージェンツ運河会社に

売却したパークの敷地の売却費等で合計£17,408. 1s. 2d.であったのに対し、支出は道路、フェンス、鉄柵による囲いとパーク南東部のリージェンツ・サーカス（現在のパーク・スクエアとパーク・クレセント）を含むパーク全体の植樹、新しい下水路を造成するための費用、労働者、門番、番人等への支払いで合計£53,650. 4s. 2d.であった¹⁰⁾。住宅建設が着手されておらず、地代から上がる収入がないため、収入に対して、支出がその約3倍になっている。しかし、住宅建設が始まれば、収入増となることは織り込み済みであり、何よりも「主だった支出は今や終わりに近づいた」とあることから¹¹⁾、同報告書出版の頃までには、パークの基礎工事が終わる目処が立っていたことを窺わせる。

3年後の1819年に出版された『第3報告書』では、1815年10月から1818年12月までの収入の部が牧草地の賃貸料、パークで栽培されていたビート類の売却費、リージェンツ運河会社によって被った土地損傷の賠償金で合計£7,677. 0s. 1d, 支出の部が道路建設、フェンス、植樹、下水路設置、湖の掘削、湖に架かる橋の建設、そして門番、番人、労働者への支払いで合計£16,395. 4s. 10d.であった¹²⁾。本格的な住宅建設は1820年代から始まるためいまだ地代の計上がなく、収入に対して、支出が約2倍となっているが、その前の4年間と比べて支出額はかなり減少しており、この第2工程とも呼ぶべき期間で、当該パークの造成工事は終了したと考えることができる。このうち、本稿では、『第2報告書』にまとめられた4年間を主に扱うこととする。

3. 運河建設

上述のそれぞれの工事は順を追って行われたわけではなく、ほとんど全ての工事が同時期に実行された。どの工事においても、森林局、財務省およびナッシュ3者のやりとりの詳細な記録が残されているが、建設初期において最も重視されたのが、その記録の長さから見て運河建設であるように思われる。ところが、土木工事のうち、運河建設だけがリージェンツ運河会社によって遂行さ

れており、運河建設に関わる費用も王室側からは一切支出されていない。先に触れた森林局による『第2報告書』および『第3報告書』の決算において、運河建設費用は全く支出に上がっていないのである。当該事業は厳密には公共事業とは言えず、したがって、ここではその概要を記すに留めざるを得ない。

当該運河計画は王室による事業ではなかったが、ナッシュおよび森林局のコミッショナーの1人であるグレンバービー卿（Lord Glenberrie）が当該計画に私的に深く関与していたことはよく知られている。彼らは当運河会社の株の多くを保有しており、当該事業が投機とみなされ、彼らが私腹を肥やしているとして、1812年5月の議会で厳しく追及された¹³⁾。辛くもこの運河法案（The Canal Bill）は通過するが、地理的にはパークのかなり北端に迫りやられることとなった。複数設計されたナッシュの設計図上にその変遷が克明に描かれている。第1設計図および基本設計図となった第2設計図では、運河は当該パークのより中心に近いところにレイアウトされ、湖の一部に取り込まれていたのに対し、第3設計図（1823年）および完成図としてみなされる第4設計図（1826年）においては、運河は北西部から当該パークに侵入した後、北部の境界線上をほぼ沿う形でゆるやかな弧を描きながら流れ、北東部でパーク外へと流れていく。森林局によって1812年に出版された『第1報告書』に掲載された運河の計画段階の設計図（図1）と1850年に作成された当該パーク現況図（図2）を比較することによっても、運河がパーク周縁に迫りやられた経過を垣間みることができる。とはいえ、当運河は建設当初、交通的、商業的、および物理的な側面において計り知れないほどの重要性を保持していたことは疑うべくもない事実である。

4. フェンス設置および植樹事業

森林局主導による土木工事は、1811年10月18日、財務省が森林局に対して、ナッシュの第2設計図に従って、「道路（Drive or Road）をレイアウトし、……周囲を杭で囲み、フェンスを建て、

森林樹やもみの木、カラマツ等の多様な樹木を植えること」を許可したことによって始まった¹⁴⁾。これらの中で最初に行われたのは、フェンス設置と植樹であった。フェンス設置についてはあまり多くの記録は残っていないが、1812年10月15日付けの森林局から財務省宛の報告書で、「現在、パークフェンスで囲まれている広大な敷地の境界線に向かって様々なヴィラが建設されることが提案されている」と述べられていることから¹⁵⁾、土木工事が始まって1年後には、パークフェンスが設置されていたとみなすことができる。ヴィラの建設はその後、しばらくの時間を要し、数も当初の予定より削減されたが、それに向けて、フェンス設置と同時に大掛かりな植樹が着手された。拙論で述べたとおり、植樹はナッシュのピクチャレスクデザインの創造に最も大きな役割を果たした要素であった¹⁶⁾。ナッシュの設計図上でも、植樹により美しく整備されたヴィラ建設予定地の数々が描き込まれており¹⁷⁾、建築家のみならず風景デザイナーとしても名を馳せたナッシュの手腕を見ることができる。さらに、1815年頃に作成された個々のヴィラの周囲を取り囲む馬蹄形の植樹の設計図も11枚残っていることから、ナッシュにとっても森林局にとっても、当該パークにおける植樹の最重要目的は、景観造り、とりわけ、ヴィラ周囲の風景デザインにあったことは間違いない¹⁸⁾。

しかし、当該パークでは、ナッシュは植樹による風景デザインに着手する前に、樹木というものが含有するより実質的な側面に着目し、土木工事の一環として植樹を想定していたようにも見受けられる。1811年、ナッシュは自らの設計方針を記した報告書において、「樹木が成長し、風景が美しさを増すこと」によって「建設予定地の地価も上昇し」、それにより、やがてはより高い階級の賃借人を惹きつけることができると述べている¹⁹⁾。これは、樹木の持つ経済的価値に焦点を当てた発言であると見てよい。1812年前後の設計段階から前述した1815年の個々のヴィラの設計図が描かれるまでは、初期土木工事の時期とほぼ重なるのであるが、その間は風景デザインの価値

観というよりは経済的価値観が先に来ていたと考えられる。つまり、この時期には、デザイン要素よりもパーク内の樹木を増やすことが先決とされた。それは森林局コミッショナーたちも同じ考えであり、むしろ彼らの方が植樹には並々ならぬ情熱を傾けていた。議事録には、植樹に関する話題が頻繁に取り上げられ、しばしばナッシュに植樹を急がせる注文が出されたことが記されている。

財務省から土木工事の許可が降りた直後の1811年11月、森林局は植樹する樹木の提供についての広告を出し、それに応えた近隣の複数の園芸業者たちの中から入札で、当該事業を遂行し得る園芸業者を選定することにした。11月14日の森林局への報告書においてナッシュが、入札者の中から事業遂行に相応しいジェンキンス&グウィザー(Jenkins & Gwyther) およびウィリアム・マルコム(William Malcolm)の2業者を選定し、自身の指示のもと、彼らの提案した値段で樹木の提供と植樹を行う契約を行った旨が報告されている²⁰⁾。植樹はパーク全体で行われたが、それは、いずれ伐採され、木材として売却されるものも含めて、パーク全体の風景を速やかに美化させるための窮余の策であった。したがって、後の1815年の設計図に見られるような馬蹄形の趣向を凝らした植樹ではなく、2種類の樹木を「5点形(“quincunx”)と呼ばれる形式」で植えていくシステムティックな方法を推奨している。さらに、2業者の間に「競争心を形成する」目的で、マルコムには敷地の南西端から始めて東側に向けて植樹を行わせ、ジェンキンス&グウィザーにはパークの中心近くの円形広場ダブルサーカス(現在のインナーサークル)から始めて東側に、その後、北側に向かい、最後に西側に向かわせ、「勤勉な方がより広範囲を植樹する」、すなわち、より多くの報酬を受けるというやり方を採用した。これらの植樹でナッシュは当初、14,500本程度の植樹を見込んでいた²¹⁾。

ここには、業者たちに対するナッシュおよび森林局の強気の姿勢が見受けられるが、それはその後も続いた。当該事業への参画が決まった直後、ジェンキンス&グウィザーは、ダブルサーカス内

に種苗場を構えることにし、1812年2月8日、森林局と土地の賃貸契約を結んでいる。それは、「果樹と森林樹の若木や低木の育生および花卉栽培」を目的とし、年額1エーカーにつき£6でリースするという内容であった²²⁾。ダブルサーカスは、ナッシュの第2設計図に描かれているように、内側、外側の二重の円形の道路をレイアウトし、そこにテラスハウスを建設する予定であった。後にその計画が挫折して、二重ではなく一重の円形道路になり、テラスハウスも建てられず、1816年以降、円の外側に面して3戸のヴィラが建設されるだけにとどまったが、建設当初は、パーク周囲のテラスハウスと同様、ダブルサーカス建設も住宅地開発計画にとって必須事項として捉えられていた。したがって、ジェンキンス&グウィザーとの契約は、森林局側から見れば、彼らに住宅地開発に向けて、ダブルサーカス内に膨大な植樹を行わせることができ、しかも、住宅地として開発業者が開発に着手するまでの間、彼らから土地の賃貸料まで要求できるとするもので、森林局のコミッショナーたち自身が議事録に記しているように、「非常に好都合」な取り決めであった²³⁾。ジェンキンスらは、あくまでも自分たちの商売である果樹の種苗場とすることを考えていたのであるが、森林局および財務省は、当初、宅地開発の一環として、ダブルサーカス内を「森林樹からなる林」とすることを念頭においており、両者の間の見解の違いは甚だしいものであった²⁴⁾。1813年2月1日、ジェンキンスらが森林局に対して、森林樹の育成により、彼らの果樹が傷つけられており、商売が台無しになっている現状を告げ、「心が非常にかき乱され、自分の計画がひどく失敗し、一睡もできない」と手紙をしたためている²⁵⁾。

そこでは、ジェンキンスは契約を数年で辞退する可能性についても示唆しながら、賃貸料の値下げへの希望を述べている。この手紙はジェンキンスらからの賃貸料をめぐっての駆け引きとみなすこともできるが、財務省側も、同月23日、ダブルサーカスにおける住宅地開発を推進するかどうかの決定を先延ばしにしながら、しばらく、ジェ

ンキンスらに森林樹を栽培させ続けるという冷淡とも取れる決定を下している。しかも、財務省は森林局に対して、ジェンキンスらによるダブルサーカスでの植樹に最大の注意を払い、「最終的には王室の保有となる……植樹された樹木が、オーク、トネリコ、シカモア、ニレ、ブナ、カラマツ等の最も質の良いものであるように気を配る必要がある」と主張している²⁶⁾。

また、1812年7月1日、ジェンキンスらは1811年11月から1812年4月までの諸経費として、£1,595. 3s. 9d. を森林局に請求しているが、その請求書を精査したナッシュは同年11月17日、£369. 3s. 1d. が過剰請求であると森林局に報告した。それらは、実際の植樹費用、土地の排水費用、ナッシュが土地に視察に来た際にジェンキンスの代理で案内した人への報酬等であるが、ナッシュは本事業の契約は樹木の提供のみであるとして、それ以外のものを過剰請求に該当するとして退けたのである²⁷⁾。それだけでなく、森林局はジェンキンス&グウィザーおよびマルコムが1812年12月までに当該パークで行った植樹内容を精査し、成長した樹木および枯れた樹木数を数えている。前者ジェンキンス&グウィザーの場合は、合計13,942本植樹したうち、成長した樹木は10,129本で、枯れた樹木は3,813本であり、後者は成長した樹木810本に対し、枯れた樹木が844本であり、数だけ見ると、ジェンキンスらの方が優秀であった。にもかかわらず、森林局は同月19日、ジェンキンスらに対して、枯れた樹木の代わりに再植樹を命じており、同月21日、彼らがそれに従うことを了承する記録が残っている²⁸⁾。

パーク内部の植樹がほぼ完了した後、1813年末から1814年にかけて、主な植樹は南側や北側運河沿い、およびパーク南東部のリージェンツ・サーカス沿い等、末端部分に移っていた。しかし、これはパーク中心部の植樹と比べて重要性において劣るということではなかった。というのも、南側も北部運河沿いも当初は多くのヴィラがレイアウトされる予定だった場所であり、一方、リージェンツ・サーカス沿いは、パークの入り口で最も早くテラスハウス建設が始まった箇所であ

り、いずれの植樹も、住宅開発を効果的に進めるためにも重要な要素とみなされた。南側沿いの植樹についてはジェンキンス&グウィザーは契約条件を理由に辞退しているが²⁹⁾、北側運河沿いの植樹については関与している。運河が一応の完成を見た1813年11月に、その年の植樹シーズンに間に合わせるため、ナッシュは森林局に対して、北側運河沿いは「今や地ならしをされ、耕され、植樹にとって最高の状態である」と報告し、速やかな植樹を促している³⁰⁾。それを受けて、同月24日、森林局は、広告による入札を行わず、ジェンキンス&グウィザーかマルコム、ケネディー&リー（Kennedy & Lee）等これまでパーク内の植樹に関わった業者に植樹を委ねることを財務省に提案している³¹⁾。それに対して、12月10日、財務省はダブルサーカスでのジェンキンスらとの契約への不満を理由に彼らを候補者から省くように申し入れている³²⁾。しかし、1814年11月30日、12月20日および12月31日付けの樹木受領リストにおいて、北側運河沿いの植樹として、ケネディー&リーからの500本のブナ、500本のオーク、200本のプラタナス、50本のチューリップの提供以外に、ジェンキンスらからも200本のニレ、50本のオーク、100本のライム、100本の栗の木、50本のシカモアを受領した記録がある³³⁾。また、リージェンツ・サーカス沿いの植樹については、1814年2月14日、ナッシュは樹木提供業者の候補として、ジェンキンス&グウィザー、マルコム、ケネディー&リーを含め、5つの業者からの入札提案書を森林局に送っている³⁴⁾。

1815年11月8日に、ジェンキンス&グウィザーは、森林局宛の手紙で、ダブルサーカスに種苗場を構える契約を結んだ時、彼らは当該パークの植樹を一手に引き受けることを期待させるよう仕向けられたが、最初の数年以降、あまりにパーク内での仕事がなすすぎるとこぼしており、自分たちが提供する植物は、より距離の離れたところから運ばれてくる植物より3倍も質がよく、したがって、自分たちの提示する入札価格が他と比べて高かったら、他の者に合わせて低くし、他と同じくらい良い植物かそれ以上のものを提供するつも

りであると述べている。これに対して、同月11日、森林局は、近隣の複数の業者に平等に接する必要があるとの返答をしている³⁵⁾。一連の植樹事業を通して、冷淡に徹した財務省と森林局の態度であったが、ジェンキンス&グウィザーはその後も当地に種苗場を保持し続け、1839年にインナーサークルに王立植物園（The Royal Botanic Society's Gardens, Regent's Park）が開園されるまで、リース権を所有し、園芸業者としての名声を確立している。

5. 道路建設

道路建設は、当初、フェンス設置および植樹と同一工程と見做されていたふしがある。このことは、前節冒頭で引用した1811年10月18日付け財務省議事録からも明らかである。当該パークは1841年に部分的に一般開放されるまでは、内部に建設された複数のヴィラと周囲に建設されたテラスハウスの住人のみが入園を許可された特権空間であった。したがって、森林局はフェンスを設置し、パークへの一般人の入園を阻止したが、同時に当該パークに建設予定の高級住宅地のリース権の購入意欲を上流階級や富裕層の人々に掻き立てるため、外部からパークの風景を楽しむことができる道路が必須であると考えていた。王室歳入向上の目的から、より高い賃貸料を獲得するためには、より上層の人々を当地に惹きつけ、地価を上げることが肝要であった。道路建設、とりわけ、周回道路建設の重要性については、前述の1811年10月18日の財務省議事録上で「パブリックが敷地の美観を観察できるような……手段を提供することによって、立派な富裕層がそこに豪華でエレガントな住居やヴィラを建てようとする動機を早い段階で生み出す」ことができると述べられている³⁶⁾。

しかしながら、1813年に北部を流れる運河の流路が決定されるまで、道路のルート設定が困難であったため、当該パークでの道路建設は部分的なそれを避け得なかった。とりわけ、パーク北側はポートルランド公爵家の領土と接しており、したがって、パーク最北周縁に沿った道路はポートル

ンド公爵家エステートとの境界線として絶対的に必要であったが、それは運河の流れに左右されるものでもあった。なお、パーク南側はこれまたポートルランド公爵家の領土と接しており、当該王室エステートはポートルランド公爵家の領土に南北を挟まれていたのである。その南側の境界線をほぼ成立させる形で1756年に東西を走る幹線道路としての New Road の開発が緒に就いており、当該パーク建設頃までには、それはパディントンとイズリントンを結ぶロンドン最初のバイパスとしての名声を確立していた(図1上でパークの南端を横切る形で東西に New Road が走っている)³⁷⁾。さらに、運河の流路という不確定要素は、パーク全体の周回道路の設定にも影響を与えることとなった。したがって、パーク全体に関わる道路建設はそれらが明確な形を取り始める1813年後半頃まで着手されなかったのである。

その間、道路工事として行われたのが、パーク南東部入り口のリージェンツ・サーカスとパーク中央のダブルサーカスの周囲等部分的なものであった。前者は、建設業者チャールズ・メイヤー(Charles Mayor)が当該パークにおける最初のテラスハウス建設として王室から建設リース(building lease)を取得し、1812年頃から住宅建設を始めた区画であるが、メイヤーの破産により、1816年頃に工事が中断し、別の建設業者によって建設工事が再開されるまでの数年間、建設途中の建物が未完のまま吹きさらしの状態で放置されたいわくつきの建物であった³⁸⁾。とはいえ、当該パークにおいて最初に着手されたテラスハウスであったため、道路建設も初期から行われたもようである。また、後者のダブルサーカスは前述のとおり、パークのほぼ中心に位置し、植樹事業が最初に行われた場所であり、したがって、ダブルサーカス沿いの道路建設も同時に進められたと考えられる。

これら両者の道路建設を主に請け負ったのが、ビルダーのサミュエル・ジョーンズ(Samuel Jones)である³⁹⁾。これらの仕事のうち、彼は1814年2月、森林局に対して支払いを請求しているが、同年11月21日付けの請求には、道路建設とは直接

関係のない項目、たとえば、リージェンツ・サーカスにおける住宅建設工事費や砂利掘削費が含まれており、森林局はそれらが過剰請求にあたるとして、ナッシュに調査を命じている⁴⁰⁾。ナッシュは、その調査報告書において、リージェンツ・サーカスにおける彼の仕事のうち、住宅地建設のための基礎工事については、建設リースを取得しているメイヤーと工事を請け負ったジョーンズの間の契約であり、王室の管轄外にあるため、その基礎工事費を王室に請求することはできないこと、また、周囲の道路の掘削費は王室が持つが、掘削によって産出される砂利は、王室の所有となることがメイヤーとの間の取り決めとして最初からなされていること、さらには、その砂利の掘削費は、道路建設に関する王室とジョーンズとの間の契約により、ジョーンズに支払われる報酬にすでに含まれていることを指摘している。これにより、実際にジョーンズに支払われる費用は彼の請求する£7,677. 17s. 9d.ではなく£7,436. 10s. 9d.と計算された⁴¹⁾。しかし、ジョーンズはしつこく食い下がったため、この問題は、頻繁に行われた森林局コミッショナー会議でもしばしば議論された。

この問題が大いに関係していると思われるが、道路建設が部分的なものから周回道路のようなより全体的なものに向かうにつれ、ビルダーの選出や建設方法の決定は細心の注意を払って行われた。1814年5月5日、ナッシュは森林局に報告書を提出し、これまで北部の運河建設の行方に妨げられて実行不能であったパーク最北の境界線道路の建設をパーク外周沿いの周回道路とともに着手する許可を詳細な設計仕様書付きで求めている⁴²⁾。道路は砂利敷きを前提としており、ジョーンズの件からも明らかのように、砂利の入手は必須事項であった。実際、ナッシュは先に行われた植樹工事と並行して、1811年末にはすでに道路建設に必要な砂利を探す目的で方々を少しずつ掘削させている⁴³⁾。その結果、当該パークにおいては、砂利は主に敷地南側以外には産出されないことが明らかとなり、砂利が価値あるものとして捉えられていた。パーク最北の運河外側の北側道路とパー

ク外周沿いの周回道路の2件の道路建設に関する当該仕様書についても、ナッシュはこれまでの部分的な道路建設に比して大幅にアップした費用に関して、当該パークは大半が粘土とあまり役に立たない石が混じった土壌からなっており、パーク内のその他の場所で砂利が必要とされたこともあり砂利が不足している点を挙げ、さらには採石場近くの道路が未完成につき、砂利を当該道路建設予定地に運ぶ距離がより増大したためと但し書きをつけて説明している。その他、北側道路と周回道路の両者について、道路の距離と幅、それに付随する歩道の幅とその建設にかかる費用がそれぞれ見積られ、さらに、それぞれに排水溝費用と汚水溜め設置費用も見積られている⁴⁴⁾。

これに対し、森林局は1週間後の5月12日、ナッシュの提案した道路幅を修正し、最終的に、砂利敷きの馬車道幅が36フィート、その両端の歩道が7フィートずつ、合計50フィートにすることを決定している⁴⁵⁾。植樹作業と同様、森林局および財務省は土木工事に関することについては全てをナッシュに任せるのではなく、かなり踏み込んだ判断をしている。入札に関しても同じである。当該道路工事について4業者からの応札があり、ナッシュがそれらを精査して、5月31日の報告書で森林局に報告している。ナッシュは、4業者のうち最も安価な札を入れた業者はこれまで当該パークに関わる諸工事で評判がよくなかったとの理由で退け、逆に、必ずしも最低価格ではなかったものの、これまで信頼の置ける仕事をしてきたヒュー・マッキントッシュ (Hugh McIntosh) を推している。そのマッキントッシュに対して、ナッシュは「公平性と誠実さという観点で彼と他の人々の比較」をするつもりはなく、ただ、彼の持つ「物理的な力」、すなわち、「膨大な量の馬や道具を揃え、資金を効率よく運用し……これまで契約を公平に実直に遂行してきた」ことを評価するとしている。が、つまるところ、ナッシュはマッキントッシュの仕事の全容を賞賛しており、彼の入札が最低価格の者よりも若干高いことを「残念」とまで述べている⁴⁶⁾。前述のようなジョーンズに悩まされた経験からすれば、マッキントッ

シュの持つ素養は何ものにも変え難いものであったのであろう。

ナッシュの報告書に対して、森林局は、ナッシュの意向を汲み取り、柔軟な姿勢を見せた。6月21日の会議において、彼らは、最低価格ではあるが、これまでの評判が良くない業者は退け、代わりにナッシュの推奨するマッキントッシュに対して、入札額よりも下げて1ロッドあたり£7. 3s. 0d. で行うという条件で周回道路の建設を請け負わせ、もう一方の北側の道路建設を応札のあった4業者のうちの1人ジェームズ・エリス (James Ellis) に1ロッドあたり£8. 9s. 6d. で請け負わせることを決定したのである。後者については、ナッシュはほとんど知らなかったため却下していたが、森林局は、リージェンツ・サーカス付近の工事でメイヤーのために働いたことのあるエリスについてはよく知っており、彼を除外する理由はないと判断したのであった⁴⁷⁾。1811年から1815年頃までの基礎工事期間における史料、すなわち、ナッシュと森林局間の書簡や、森林局および財務省の議事録等において、この後、北側道路や周回道路に関する記述はほとんどなく、工事が順調に進んだものと推測される。上述のジョーンズに関する記述が頻繁に出てくると比べると、その差は歴然としている。

6. 湖の造成

当該パークにおける湖は植樹同様、ナッシュによる風景デザインの核となる要素であった。拙稿で論述したとおり、ピクチャレスクな風景の創造には、イレギュラーな形を持ち、周囲に樹木を美しく配置した湖は欠かせない存在であり、ナッシュが最も熱心に取り組んだデザイン設計の一つであった⁴⁸⁾。ナッシュによる複数の設計図がそのことを物語る。しかし、そのデザイン設計および施工の前には全般的な基盤整備が必要であり、それが出揃った結果を見る限り、ナッシュの土木技師としての手腕の確かさは、一等地を抜いていると言うべきであろう。

一方、森林局および財務省は、これまでの諸々の事業以上に、湖造成においては実利、かつ効率

重視の姿勢を貫いている。運河造成と同様、当初、森林局および財務省は資金を投入せずに造成を試みた。当該パークの敷地は粘土質であることは前節で触れたが、森林局や財務省の面々は、湖造成のための掘削により出土する大量の粘土から煉瓦を現場で製造する権利を契約を結んだ業者に与えるという方策を採用した。これにより当局は業者に湖に係る掘削費を支払う必要はなくなり、それどころか、従事する業者に造成予定の湖の面積分の土地賃貸料すら要求した。この賃貸料自体は、パーク造成が完了するまでの有効利用として賃貸に出していたパーク内の牧草地と同じ安価な賃貸料に抑えられてはいたものの、王室サイドとしては、掘削費用を捻出することなく、湖の完成を達成することができ、なおかつ、土地賃貸料まで転がり込むという誠に巧妙な策であった。逆に、建設業者から見れば、大量の煉瓦を創造することによって莫大な利益につながる可能性はあるものの、湖の広大な面積を考慮に入れるならば、リスクの高い事業であった⁴⁹⁾。

1812年11月から12月にかけて入札が行われ、2人の建設業者が名乗りを挙げた。1813年2月にジェームズ・バット (James Butt) が建設業者として選ばれ、同年4月27日に契約が結ばれた⁵⁰⁾。しかし、ナッシュは当初からバットの入札内容に懸念を表明していた。2月9日、ナッシュは、湖の掘削によってできる煉瓦は5,900万個に相当するが、現場で型を取り、煉瓦を製造するため、およそ5年の歳月を要することになり、その間、現場の美観を著しく損ねることから、パーク内部および周囲の住宅のリース権を売却することに支障が生じると述べている。彼は森林局に、掘削費用が捻出できれば、業者による煉瓦製造に頼る必要はなくなり、湖造成期間が短縮でき得るのならば、それだけ早く住宅建設にとりかかることができ、それだけ早く地代を徴収できるため、最終的には早期に利益をもたらすと進言した⁵¹⁾。それに対して、財務省は、同月27日、建設業者による住宅建設には、湖における煉瓦製造と同じほどの年数がかかるであろうから、住宅地のリース権売却の時期に影響を与えるものではないと返答

し、煉瓦製造と引き換えに業者による掘削を無償で実施させること、すなわち、湖造成に資金投入は行わないとの決定を下した⁵²⁾。

しかし、この件に関しては、ナッシュの読みの方が格段に鋭かった。バットは単独で掘削を始めたものの、続行することができなくなり、途中で仕事を放棄した。現場ではあちらこちらが掘り返され、粘土を煉瓦にする工程の途中のものが方々に転がったままで何ヵ月も放置されるに至った。森林局による1814年4月13日付け議事録には、局コミッショナーのグレンバービー卿が、前日に当該パークを訪れた際、「バット氏が建設予定の湖の湖底を掘削するという契約の実行においてほとんど進展が見られず、彼が過去数ヵ月間の作業において人を1人も雇っていない」ことを発見したと自ら発言したことが記述されている⁵³⁾。同年6月30日には森林局所属の弁護士にバットへの対処が依頼され、8月25日、弁護士からは森林局に対して、バットではなく別の人に仕事を請け負わせ、バットにはその旨通知するようとのアドバイスが出された⁵⁴⁾。バットには弁護士から何度も手紙が書かれたが、いっさい返答はなかった。翌1815年1月28日、弁護士が掘削工事が速やかに再開されない限り、作業が他の業者に引き継がれ、彼自身は訴訟の対象となると最後通牒を行ったところ、2月15日になって、漸くバットから返答があった。彼は、「契約を遂行するつもりであったが、自身の責任ではない理由で失敗したということが……唯一の弁明である。クラブトンの自宅を処分し、近隣での煉瓦造りを終わらせ……すぐにパークで働き始めた。……莫大な費用をかけて何通りかの方法で煉瓦製造を行ったが……どの方法においても失敗した。これまで£1,450も費やした。……(当該パークの)粘土は販売用の煉瓦製造には適さないことがわかり……破産した」と述べている⁵⁵⁾。

ナッシュは、バットからの真相を記した手紙が届くより前の1814年12月29日、対応策を記した報告書を湖部分の設計図(図3)とともに森林局へ提出している⁵⁶⁾。当該設計図を1811~2年にナッシュ自身が作成した基本設計図における湖部

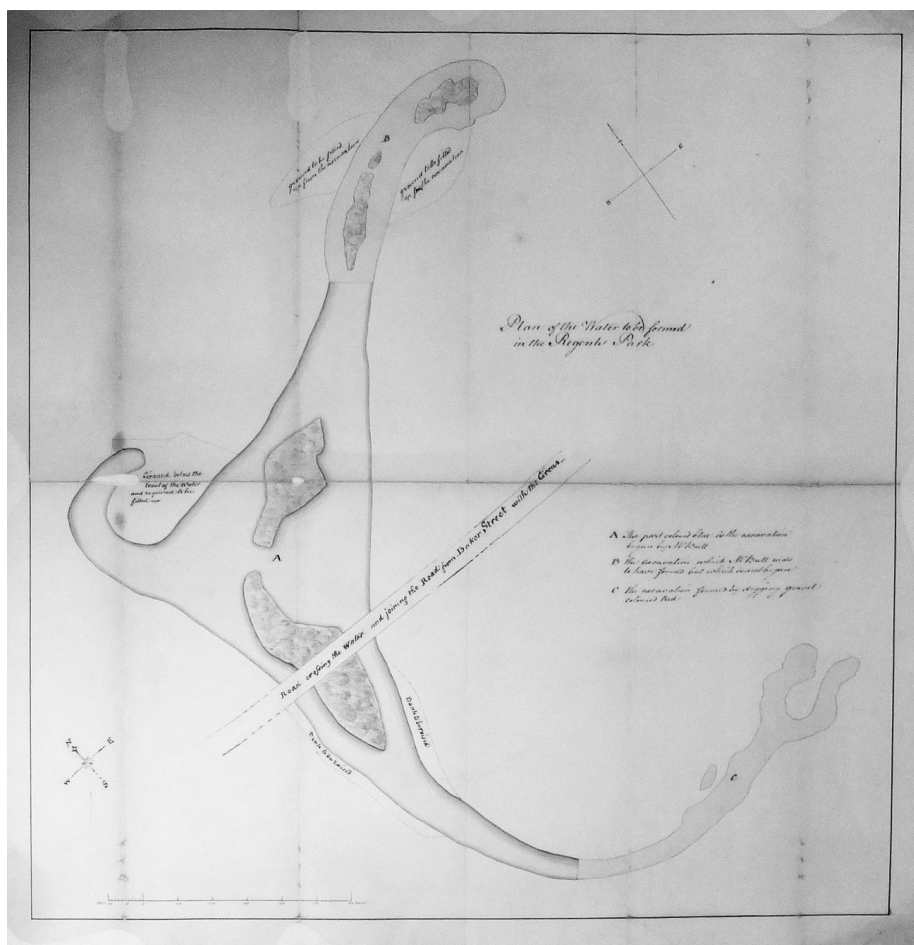


図3 ナッシュによる湖の設計図（1814）

〔出典：The National Archives, MPI 1/573/4〕

分と比べると、湖の形状自体にはほとんど変化はなく、湖に浮かぶ小島の数や岬の縁の形に変更が加えられた程度であることがわかる。しかし、当該設計図では、バットによって掘削工事が開始されたものの中断された箇所と今後の掘削場所が明示され、対処方法が記されている点が基本設計図とは異なる。具体的には、「A」と記された大部分を占める中央部分の青色に塗られた箇所はバットによる掘削工事が中断されている箇所であり、あちこちが掘り返されている状態である。そのうち、湖の西端は「水面より低い土地のため、埋め立てが必要」との記述、また、中央部の島の両側の土手も「盛土が必要」との記述がそれぞれ書き込ま

れている。「B」と記され、黄色で着色された最北の岬にあたる部分は、バットによって掘削される予定であったが、まだ着手されていない箇所であり、その岬の両岸は「掘削により埋め立てが必要」との記述が見える。最後に、「C」と記され、赤色で着色された最南部の岬部分は、砂利でできた箇所であり、すでにバットによって砂利がいくらか掘り返されていた。ナッシュはこの設計図に同封された報告書にて、A部分を完成させるのに、£1,445. 9s. 6d. の経費が必要と予想している⁵⁷⁾。

1815年4月24日、ナッシュは森林局への報告書において、道路建設でも評判のあった前述のマッキントッシュがA部分の掘削作業に名乗りを上

げていること、また、B部分についてはこれも前節の道路建設で触れたエリスが立候補していることを述べ、C部分については、今後、パーク内の道路建設に使用することを推奨している⁵⁸⁾。これを受けて、5月13日、森林局は、バットが残した煉瓦用土の塊を自費で2ヵ月間という期限内にできるだけ取り除くとするエリスの申し出を受け入れ、さらに、エリスが作業した後に残る部分については、マッキントッシュに依頼し、1ヤードにつき1シリングで掘削させ、湖に浮かぶ小島を造成させることにした⁵⁹⁾。ここにおいて、湖造成には費用を充当しないとする森林局および財務省の当初の企ては挫折することとなるが、それでも、バットが失敗した作業を短期間ではあるが無償でエリスにさせる等、老獪さは最後まで健在であった。再開された掘削工事のうちA部分が1815年から1817年にかけてマッキントッシュによって行われたことは、彼から森林局に当てて送られた複数の請求書から判る。1815年10月中に£583. 8s. 6d.、その後、1817年に£273. 7s. 4d. の請求書を出している⁶⁰⁾。エリスが煉瓦を作るために煉瓦用土を取り除く作業を行ったが、それ以外は、マッキントッシュによって掘削と湖内の小島の形成が行われたのである。第2節で述べた当該パークに係る決算について、『第2報告書』ではなかった湖掘削費が『第3報告書』の支出の部が上がっているのはこれらの事情が介在したからと言えるであろう。結局のところ、湖造成のための掘削費用を捻出すべしとしたナッシュの提言どおりになったのである。

基礎工事期間は超えるが、1819年11月3日には、ナッシュの同僚であるジェームズ・モーガン(James Morgan)が森林局に向けて、「最も浅い箇所でも4フィート(約120cm)の高さになるように、さらに掘削すべき敷地面積を確かめるための測量が最近の悪天候のせいで困難であった」と記述しながら、先の設計図上ではBにあたる部分をより深く掘削し、水で満たすため合計£206. 9s. 9d.の見積り額を提示している⁶¹⁾。湖造成に係るその後の工事の記録として1822年6月の湖に架けられた橋を広くすることと、同年9月の湖を拡大させるこ

との2点が少なくともあるので⁶²⁾、湖の造成自体は1820～21年の間に完了したと推察できる。

おわりに

当該パークの造成過程において、運河、フェンス設置および植樹、道路建設、湖造成等の項目を概観するに、当時としては、基盤整備の諸事業が大掛かりなものであったこと、かつ困難を極めたものであったことなどが浮かび上がる。ナッシュの功績は群を抜く。喩えて言うならば、絵を描く前にキャンパスや絵の具、筆などの吟味にたっぷり時間を費やす画家のごとくに、風景デザインに専念する前に、基盤整備に全力を傾注した有能なシビル・エンジニア、かつデザイナーであったと言えよう。

湖造成においてバットが放棄した後、計画遂行に向けて作成した前述の設計図(図3)には、土木工事の設計図でありながら、その後の風景デザインにつながる洗練さが見受けられる。ナッシュ自身が美しい風景を創り出すお膳立てとして基盤工事に従事したさまが顕著である。その土木技術者としての素養については、これまであまり省みられることはなかったが、植樹や道路建設、とりわけ湖造成についてのナッシュの洞察力はひたすら鋭いと兜を脱がざるを得ない。

基盤整備の諸事業における森林局および財務省の抜け目のない対応ぶりは、現代と比べてもいささかも遜色はない。その結果、当該パークは実現したと言えなくもないが、その陰に事業に携わった業者やビルダーたちの資金調達への労苦、破産の悲哀等々の現実があったのである。

最後に、当該パークの基盤整備の重要事業の一つに下水整備がある。第1節で触れた森林局による『第2報告書』および『第3報告書』の決算にも下水路整備の項目がある。本稿で取り上げた植樹事業においても、ジェンキンスが排水工事を行っているし、道路建設でも排水設備および汚水溜め設置の工事が行われている。それらは下水整備の一環であるが、当該パークにおける下水路整備は、リージェント・ストリート計画における下水整備と密接に結びつく大きな事業なので、本稿で

はあまり触れなかったが、次の課題としたい。

注

- 1) John Summerson, *Georgian London* (1945, New Haven and London: Yale UP, 2003) pp. 196–216; Hermione Hobhouse, *Regent Street: A Mile of Style* (1975, Chichester: Phillimore, 2008); Dana Arnold, *Rural Urbanism: London Landscapes in the Early Nineteenth Century* (Manchester: Manchester UP, 2005) pp. 75–96.
- 2) Geoffrey Tyack, “Reshaping the West End,” in Tyack ed., *John Nash: Architect of the Picturesque* (Swindon: English Heritage, 2013) p. 101–24.
- 3) たとえば, J. Mordaunt Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” in Tyack ed., *John Nash*, pp. 75–100を参照。
- 4) Summerson, *The Life and Work of John Nash, Architect* (London: George Allen & Unwin, 1980); Ann Saunders, *Regent’s Park: A Study of the Development of the Area from 1086 to the Present Day* (London: Bedford College, 1969); Todd Longstaffe-Gowan, *The London Town Garden 1740–1840* (New Haven & London: Yale UP, 2001) pp. 231–47.
- 5) 芝奈穂「19世紀初頭における王室リージェンツ・パーク・エステート計画に関する考察」『愛知学院大学文学部紀要』44 (2014): pp. 71–82.
- 6) Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 75.
- 7) Arnold, *Rural Urbanism*, pp. 52–71.
- 8) Jonathan Clarke, “Pioneering Yet Peculiar: John Nash’s Contributions to Late Georgian Building Technology,” in Tyack ed., *John Nash*, p. 153.
- 9) *The Second Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues* (1816) p. 17. なお, 改定設計図は『第2報告書』に添付され, 後述する第3設計図および第4設計図は, それぞれ『第4報告書』(1823), 『第5報告書』(1826)に収められている。
- 10) *The Second Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, p. 17.*
- 11) *Ibid.*
- 12) *The Third Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues* (1819) p. 11.
- 13) 芝奈穂「リージェンツ・パーク設計の政治学—王室エステート計画から一般開放へ」『ヴィクトリア朝文化研究』15 (2017): pp. 50–51; Crook, “John Nash and the Genesis of Regent’s Park,” p. 79.
- 14) Quoted in the minutes of the Board of the Commissioners of His Majesty’s Woods Forests and Land Revenues, 11th November 1813, Cres 6/119, p. 272.
- 15) Cres 6/119, p. 51.
- 16) 芝奈穂「リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造」『人間文化』35 (2020): pp. 10–15.
- 17) ナッシュの第2設計図から第4設計図に至るまで, ピクチャレスクな趣向を見て取ることができる。
- 18) MPE 1/1128. しかし, この設計図については, これまでほとんど研究されておらず, 精査が必要である。
- 19) *The First Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, Forests, and Land Revenues* (1812) Appendix 12 B, p. 87.
- 20) Cres 2/745.
- 21) *Ibid.* また, Summerson, *The Life and Work of John Nash, Architect*, p. 116も参照。
- 22) Cres 6/119, p. 78.
- 23) *Ibid.*
- 24) *Ibid.*, pp. 81, 85.
- 25) *Ibid.*, p. 81.
- 26) *Ibid.*, pp. 83–85.
- 27) Cres 2/745. しかし, 1814年末になって, 森林局はこの過剰請求についての決定を見直すことにし, 1814年12月20日, ジェンキンスらにいくつかの項目を除いて, 合計£309. 15s. 1d.を支払うことを伝えている。
- 28) Cres 2/745.
- 29) Cres 6/119, p. 269; Cres 2/751.
- 30) *Ibid.*, p. 267.
- 31) *Ibid.*, p. 266.
- 32) *Ibid.*, p. 270.
- 33) Cres 2/745. また, 1815年1月19日付けの樹木受領リストでは, ケネディー&リーから1,400本, ジェンキンスらから100本とする記録が残されている。
- 34) Cres 2/745.
- 35) Cres 25/18, min. 3033.
- 36) Cres 6/119, p. 279.
- 37) 芝奈穂「18世紀後半から19世紀前半における王室メリルボン・パーク・エステート計画に対するポートランド・エステート開発の関わりについての研究」『人間文化』(2016): pp. 19–39.
- 38) *The Second Report of the Commissioners of His Majesty’s Woods, pp. 17–18.*
- 39) Cres 2/747.

- 40) Cres 25/14, p. 394.
- 41) Cres 25/16, min. 1964; Cres 2/747.
- 42) Cres 2/747.
- 43) Cres 2/745.
- 44) Cres 2/747.
- 45) Cres 25/16, min. 1386.
- 46) Cres 2/747.
- 47) Cres 25/16, min. 1541.
- 48) 芝「リージェンツ・パークの設計者ジョン・ナッシュによる「田園的ピクチャレスク風景」の創造」
p. 13.
- 49) Cres 6/119, pp. 85–90.
- 50) Cres 38/1274.
- 51) Cres 6/119, pp. 100–101.
- 52) Ibid., pp. 101–102.
- 53) Cres 25/16, min. 1302.
- 54) Ibid., mins. 1857, 1734.
- 55) Cres 2/753.
- 56) MPI 1/573/4; Cres 2/753.
- 57) Cres 2/753; Cres 25/16, min. 2111.
- 58) Cres 2/753.
- 59) Cres 25/16, min. 2527.
- 60) Cres 2/753; Saunders, *Regent's Park*, p. 171.
- 61) Cres 2/753.
- 62) Ibid; Cres 19/2, p. 121.